

平成16年度 生涯学習・研修支援部会の活動報告

部会長：加藤光寶¹⁾ 班長：中村博生²⁾ 部会員：田中キミ子³⁾，
佐々木美佐子⁴⁾，深澤佳代子⁵⁾，堀 良子⁶⁾

- 1) 新潟県立看護大学(成人看護学Ⅰ)，2) " (情報科学)，3) " (老年看護学)，
4) " (地域看護学)，5) " (成人看護学Ⅱ)，6) " (実践看護学)

A Report of Continuing Education Programs on Health Promotion
by NIRIN in 2004

Kato Mitsuho¹⁾, Nakamura Hiroki²⁾, Tanaka Kimiko³⁾,
Sasaki Misako⁴⁾, Fukasawa Kayoko⁵⁾, Hori Ryoko⁶⁾

- 1) Niigata College of Nursing (Adult Health Nursing-Chronic Care Division) ,
2) " (Information Science)
3) " (Gerontological Nursing),
4) " (Community Health Nursing),
5) " (Adult Health Nursing-Acute Care Division)
6) " (Nursing Art Practice in Nursing Skill)

I. 活動の目的と内容

看護研究交流センター生涯学習・研修支援事業は、主として県民の生涯学習の支援及び看護職員等の現任研修に関する事業を行うことを目的として活動する。活動内容は、看護研究交流センターが主催する生涯学習・研修支援事業に関する企画、運営、広報等である。

II. 平成16年度生涯学習・研修支援事業

1. 一般公開講座

1) 概要

今年度は、一般公開講座の特別講演として、学外から講師を招いて講演会を実施し、県民や学生の保健・医療・福祉などについての興味・関心の充足、向上に寄与するよう、企画・運営を行った。また、学内外の講師によるテーマに沿った講演では、「ナイチンゲールの時代から現代看護を読む」というテーマを設定し、5回の多彩な講師陣による講演会を企画・運営した。さらには「サクセスフル・エイジングへの挑戦」というテーマのもと学内外の講師による8回の講演会を企画・運営した。なお、この「サクセスフル・エイジングへの挑戦」は、新潟工科大学との提携プログラムでもあり、8回のうち3回は、新潟工科大学より講師を招いて講座を開講した。新潟工科大学では、本講座の第7回と第8回が提携プログラムとして開講された。

2) 開講講座と報告

(1) 特別講演

講座名	一般公開講座 特別講演
日時	平成16年7月10日(土) 13:00~15:00
会場	新潟県立看護大学ホール
受講者数	164名
講師	田村やよひ(厚生労働省 医政局看護課長)
講演テーマ	「看護政策の課題と展望」

概要

田村やよひ氏による「看護政策の課題と展望」と題した特別講演は、質問と応答を加えて、所定の時間を延長した大変興味深いものであった。内容は、保健医療福祉システムの改革から始まり、看護政策における近未来の課題についてパワーポイントを用いながら説明し、さらにはまとめに代えて看護師の業務、看護師の業務と医師の指示ということに関して、法律面からの客観的な分析と現状のギャップについて鋭い指摘を行った。

看護職の就業者の現状では、日本の施設内医療中心の問題点に触れながら、とりわけ訪問看護ステーションの看護師が減少していることを懸念しながら、デンマークの看護職は30%が訪問看護に携わっていることを指摘したことが印象的であった。

受講者からは、特に看護職をやめていく新人の多さや、外国人看護師の受け入れに関する情報などから、看護職としてのアイデンティティの育成にどのように取り組んでいったらよいのか、などの意見がアンケートの結果からうかがわれ、看護の動向が見えてきたとする高い評価を得ることができた。



(2) ナイチンゲールの時代から看護を読む (5回シリーズ)

講座名	一般公開講座 「ナイチンゲールの時代から現代看護を読む」第1回, 2回
日時	平成16年6月26日(土) 13:00 ~ 16:15
会場	新潟県立看護大学ホール
受講者数	124名
講師	小南吉彦(ナイチンゲール看護研究所所長)
講演テーマ	「ナイチンゲールの看護思想Ⅰ, Ⅱ」

概要

看護思想について、病気と病人をみる看護の視点から講義がなされた。

前半は、フローレンス・ナイチンゲールの言葉から引用された「病気とは何か?」「看護とは何か?」などの問いに対する答えの記述を、受講者に興味深くしかも重みのある解釈をもって説明がなされた。次に、ナイチンゲール看護論から引用された「看護の目的論」「看護の対象論」「看護の方法論」について述べた。そして最後に、「看護の視点からみた人間の生命過程・生活過程・認識」についてまとめ、人間の生活行動のあり方はすべて、その人の認識によって判断され選択されるとした。これら3つの過程のいずれかに乱れが生じると、その相互関連の働きによって、他の過程にも乱れが生じ、悪循環が発生し、病気という形で現れると論じた。この悪循環を断ち切るためには、いずれかの過程を整えることが必要とされ、自己の努力では困難な場合は、他者からの援助(医学的、看護介護的、心理的、福祉的、経済社会的援助)を必要とすると述べた。

ナイチンゲールの思想を現代の視点で解説し、現代の看護観に大きな示唆を与えてくださり、大変興味深かった、などこの講演に対する高い評価が多くの受講者から寄せられた。



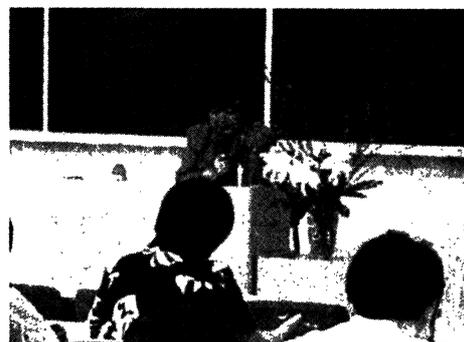
講座名	一般公開講座 「ナイチンゲールの時代から現代看護を読む」第3回
日時	平成16年7月31日(土) 13:30 ~ 15:00
会場	新潟県立看護大学ホール
受講者数	97名
講師	山本利江(千葉大学看護学部助教授)
講演テーマ	「ナイチンゲールの人間観と教育」

概要

本講座では、F・ナイチンゲールの著作から読み取った内容を資料にしながら、ナイチンゲールの人間観と教育について分かりやすく説明がなされた。

「看護覚え書」より、第13章の「病人の観察」の中の「誘導的な質問は役に立たずまた誤解をまねく」に触れ、ナイチンゲールが注目した現象、現象のとらえ方、看護的判断を例示しながら紹介した。次に、ナイチンゲールの「書簡」、「カイゼルスウェルト学園に寄せて」、「病院監督が貴婦人委員会への季刊報告」からの抜粋を示し、ナイチンゲールが現実の生活における経済観念への疑問、カイゼルスウェルト学園での教育、末期患者への対応などについて当時どのような考え方をしていたかを解説した。また、「看護覚え書」の各章を概観し、「はじめに」や「序章」にみられる、「病気とは回復過程である」などのナイチンゲールの主張の一部に触れた。その後、「カイゼルスウェルト学園によせて」から読み取った訪問看護の論理構造やナイチンゲールの看護技術の立体像、季刊報告書、「病院監督から貴婦人委員会への季刊報告」から読み取ったナイチンゲールの看護技術の立体像について解説がなされた。

受講者からは、「ナイチンゲールの今まで知らなかった部分が明確にされて、ますます看護に取り組んでいけたらよいと思いました」、「カイゼルスウェルトで行われている訪問の話や、患者にとっての医療の意味というところの話が興味深かった」、「じょくそうを治したナースの話が大変ためになりました」など、多くの反響が寄せられた。



講座名	一般公開講座 「ナイチンゲールの時代から現代看護を読む」第4回
日時	平成16年8月21日(土) 13:30 ~ 15:00
会場	新潟県立看護大学ホール
受講者数	14名
講師	水口陽子(新潟県立看護大学講師)
講演テーマ	「ナイチンゲールの時代と女性」

概要

ナイチンゲールが女性に持てる力を働かせるよう呼びかけた意図と経緯について時代背景をふまえて講義がなされた。

前半は、19～20世紀初頭のイギリスの特徴と当時の一般的な女性像について、産業革命の完成期にあたり、分業化が進み多くの女性は「淑女らしい主婦」としての役割を求められていたことなどが話された。次に『カイゼルスウェルト学園によせて』に焦点を当て、「(19世紀の女性は)知性の足だけが前に進んできているのであって、実践の足は後ろに残ったままの状態なのである」と捉えていたナイチンゲールが、ドイツにあった、病院・幼児学校・女性更生所の援助と保護などの訓練のための学園での活動を目の当たりにして「さあ、怠けることに忙しい英国の女性たちをドイツで行われていることに目を向けさせよう」と呼びかけた経緯について説明した。また『看護覚え書』の中で、看護の法則、健康の法則の無理解が家庭での衛生の欠陥を生み、乳児死亡率を高くする原因となっているなどの主張をたどりながら、彼女が、女性は誰もがナースなのであると訴えた意図について話した。最後に、ナイチンゲールの人間観に触れ、看護は女性が持てる力を働かせる対象として有意義であり、看護の法則を学びその法則にそった生活を送ることは、人間が生き生きと生活するための基本であると考えていたことをまとめとした。

受講者は、「ナイチンゲールの人間像を細かく知ることができました」、「ナイチンゲールの時代背景がよくわかりました」など、講座の分かりやすさを評価していた。



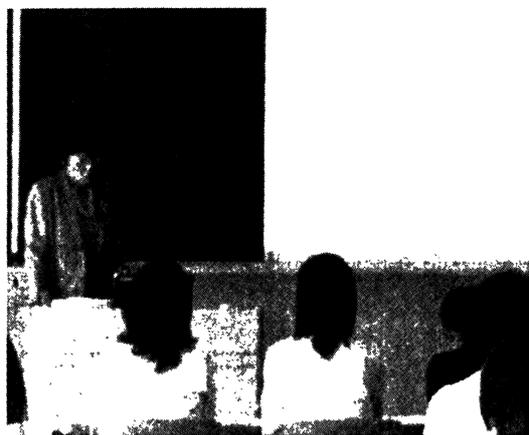
講座名	一般公開講座 「ナイチンゲールの時代から現代看護を読む」第5回
日時	平成16年9月11日(土) 13:30 ~ 15:00
会場	新潟県立看護大学ホール
受講者数	55名
講師	大田節子(千葉大学看護学部 付属看護実践研究指導センター教授)

講演テーマ 「ナイチンゲールの考える環境と看護(介護)」

概要

本講座では、ナイチンゲールが注目した環境の要素を取り上げて話が進められた。はじめに、ナイチンゲールの一生を概観し、業績、ナイチンゲールの生きた時代、ナイチンゲールの考える看護の前提、ナイチンゲールの看護理論などが説明された後、イギリスの病院と日本の病院の相違を示しながら、ナイチンゲールの考える「環境」とは、そしてナイチンゲールの健康に対する基準と実践概念を理論的に述べた。その後事例(90歳代女性の特別養護老人ホームでの生活)をとおしてナイチンゲールの看護モデルと環境への働きについて述べ、最後に生活の営みと介護の構造について説明がなされた。

受講者からは、「ナイチンゲールは、様々な方向から環境について考えていたことがわかった」、「イギリスの看護・病院と日本との違いを知り、外国の看護というものに興味・関心が湧いた」、「イギリスの写真でイメージがしっかりした」「イギリスのナイチンゲール病棟の話は日本の病棟と大きく異なることに驚いた」など、看護が求める環境について外国との比較で多くのことを学んだという声がたくさんあり好評であった。



(3) エルダリィ・スクール 「サクセスフル・エイジングへの挑戦」 (8回シリーズ)

講座名	一般公開講座 エルダリィ・スクール サクセスフル・エイジングへの挑戦 (第1回)
日時	平成16年10月2日(土) 13:00 ~ 15:00
会場	新潟県立看護大学第1ホール
参加人数	45名
講師	渡邊令子(県立新潟女子短期大学教授)
講演テーマ	「健康長寿への第一歩は食事から」

概要

「高齢者とは、何歳をイメージしますか」という問いかけから始まったこの講座は、高齢者の健康、身体計測値を用いての栄養状態の判定、摂取栄養量の推定、健康づくりのための食生活指針の4つの項目に従って進められた。その後、パワーポイントを用いながら、新潟市高齢者コホート調査結果が紹介された。

「人生100年、つまり元気で100歳を迎えることは私たちの手の届くものになりつつある」というフレーズを掲げながら、高齢者の年齢的な定義(前期高齢者(65~74歳)と後期高齢者(75歳以上))と実際の健康状態を示し、一方で世界保健機関(WHO)の憲章における「健康」の定義を考慮しながら、高齢者の健康について論じた。身体計測値に基づく栄養状態については、体重指数(BMI)を受講者とともに計算し、摂取栄養量の推定については、適正体重の算出から1日のエネルギー所要量の算出を行った。

食生活の指針では、食生活のリズム、主食を中心としたバランスの取れた食事、減塩や低脂肪の食事、地域の産物の活用などが紹介された。最後に夏と冬のほうれん草のビタミンC含有量を例に挙げ、野菜は旬のものが栄養豊富であることを指摘し、旬のものを食卓にということが推奨された。多くの受講者から、講師が平易に説明してくれたので分かりやすかった、自分の食生活のチェックをするのにいい勉強になった、などの点で好評を得た講座であった。



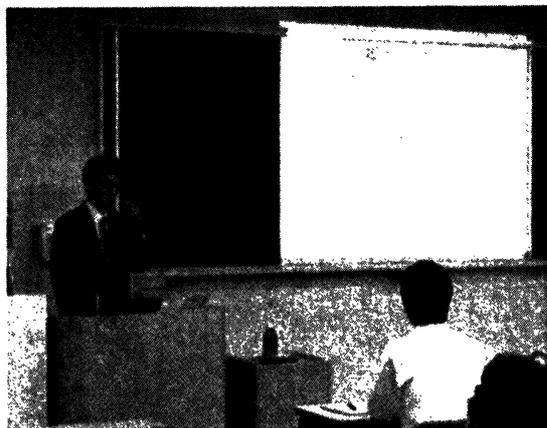
講座名	一般公開講座 エルダリィ・スクール サクセスフル・エイジングへの挑戦 (第2回) (新潟工科大学との提携プログラム)
日時	平成16年7月10日(土) 13:00 ~ 15:00
会場	新潟県立看護大学ホール
参加人数	46名
講師	村上 肇(新潟工科大学情報電子工学教授)
講演テーマ	「長寿社会の工学技術」

概要

健康で長生きしたいのはみんなの願いであるが、その「健康」とは何か。そして現在では、たとえ身体に不具合が起きたとしても、工学技術の力を借りて、より良い生活を送ることが可能になってきているが、その「工学技術の力を借りる」とは、どういうことなのか、などの疑問を解き明かしながらこの講演は進められた。

身の回りの福祉機器では、クリミア戦争時片手を失った兵士がマッチを使えないので、片手で火をつけられるようにと工夫されたものがライターであった。また、ユニバーサルデザインとは「万人向け設計」と訳し、誰にでも(健康者でも障害者でも)使いやすい物という配慮を行いながらの設計であることが紹介された。講師の研究紹介のあとの結びでは、2000年代のキーワードとして、「My Own」「リアル」「『高齢者・障害者』からの脱出」を挙げながら、エンジニアはヒトのことを今以上によく知らなければならない、と述べた。

受講者からは、豊富な資料を上手に使い、やや専門的な事柄もあったが、随所に写真を入れながら分かりやすく丁寧に話が進められたのでよく理解できた、という意見が多かった。新潟工科大学との提携プログラムの最初の講座であったが、大変好評であった。



講座名 一般公開講座 エルダリィ・スクール
サクセスフル・エイジングへの挑戦 (第3回)
(新潟工科大学との提携プログラム)

日時 平成16年10月16日(土) 13:00 ~ 15:00

会場 新潟県立看護大学ホール

受講者数 40名

講師 寺島正二郎(新潟工科大学機械制御システム工学科助教授)

講演テーマ 「高齢疾患の医療と介護・福祉・健康維持」

概要

本講座は、「退行性疾患」、「介護・福祉機器」、「これからの担い手？」の3部から構成されていた。「退行性疾患」では、バイオメカニクス、骨粗鬆症、変形性関節症&リウマチ炎、骨折などの疾患の特質に触れ、治療や予防を考慮に入れながら、工学的な立場から機器開発を通じた支援のあり方などについて論じた。「介護・福祉機器」では、福祉機器の現状分析から介護における課題(移乗、排泄、徘徊)に言及し、ユーザーのメンタル面を考慮した機器の開発が重要であることを主張した。「これからの担い手？」では、全ての人の役割を、人間にしかできないことという観点から分析し、避けることのできない老化にどう対処していくかを述べ、これからの日本を支える人の活用に関する戦略を提案した。

受講者からは、車椅子の選び方など現実的な話を統計やグラフをうまく活用しながら、ユーモアたっぷりに分かりやすく話したのでとても良かった、と好評であった。



講座名	一般公開講座 エルダリィ・スクール サクセスフル・エイジングへの挑戦 (第4回)
日時	平成16年10月23日(土) 13:00 ~ 15:00
会場	新潟県立看護大学ホール
受講者数	40名
講師	田中キミ子(新潟県立看護大学教授)
講演テーマ	「健やかな毎日を送るための健康管理」

概要

健康の定義から老人保健事業の概要、平成元年に高齢者保健福祉推進十か年戦略(ゴールドプラン)が施行され、さらに5年後に改正されたことから、QOL(クオリティ・オブ・ライフ:人々が生前にいかなる質をもってしあわせに生きたか)を求めて日本が老人保健について、充実を図ろうとしていることが説明された。

老年者のからだ、循環器、骨・筋肉・関節、転倒の4つからなる本講座は、卑近な上越市の独身高齢者の状況に触れながら、心臓病・高血圧・動脈硬化などを防ぐために、定期的な血圧測定や食事のコントロール、運動、ストレスの解消に努めることが日常生活の中で大切であると指摘した。また、転倒などで、たとえ機能が低下しても残された機能を大切に充分活用していくことが長生きのコツであると述べた。さらに筋肉、骨、脳は、休ませておくと機能が低下し、種々の障害が生じやすいので、新たな生活の目標やスタイルを求め、老年期の健康状態を良好に保つことがPPK型(ピンピンコロリ型)の終焉といわれていると述べた。

生活習慣(食生活、睡眠、運動)のチェック、健康診断、日記をつけて生活を整えるなどの工夫が、健康管理のコツであるということがまとめとして指摘された。



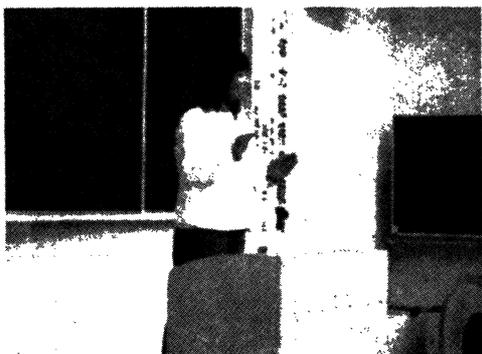
講座名 一般公開講座 エルダリィ・スクール
サクセスフル・エイジングへの挑戦 (第5回)
日時 平成16年10月30日(土) 13:00 ~ 15:00
会場 新潟県立看護大学ホール
受講者数 41名
講師 澁谷房子 (日本トランポピクス協会常任理事)
林 従子 (同 新潟県支部長)
講演テーマ 「楽しい体力維持の戦略」

概要

前半は、澁谷講師と林講師よりトランポピクスの説明と楽しく体力を維持していくための戦略について、健康のイメージや元気と病気のバランスなどの観点から講義があった。

トランポピクスは、日本生まれの運動でありエアロピクス(有酸素運動)にトランポリンを取り入れたもので、足への負担の70~80%をトランポリンが吸収してくれるとのことであった。「身体が喜び、心がおどる」トランポピクスをぜひ日常の運動不足や心のストレスの解消に活用して欲しいということであった。後半の体育館では、応援に駆けつけた指導員の方々の援助を受けながら、澁谷講師の号令のもと受講者が楽しく元気にトランポピクスを楽しんでいた。

「受講者の年齢を考えて指導してくれたことがありがたかった。」「身体を動かしてさわやかな気分になり帰路につくことができた」などと、参加者は大変良い評価をしていた。



講座名	一般公開講座 エルダリィ・スクール サクセフル・エイジングへの挑戦 (第6回) (新潟工科大学との提携プログラム)
日時	平成16年11月6日(土) 13:00 ~ 15:00
会場	新潟県立看護大学ホール
受講者数	33名
講師	飯野秋成(新潟工科大学建築学科教授)
講演テーマ	「まちづくりとユニバーサルデザイン」

概要

普通のオフィスチェアに、車椅子の車輪部分が装着されるとデザイン的にも洗練された車椅子ができる。必要なときに車椅子になり、そうでなく机に向かって仕事をするときは、オフィスチェアとして前後左右自由に動き遠くのものに手が届く。その車椅子のデモンストレーションと開発の経過から、ユニバーサルデザインのコンセプトがわかりやすく解説された。

まちづくりとユニバーサルデザインでは、学生の研究を指導している立場から、車椅子で一人旅できる鉄道システム、サンセットロード(全天候型遊歩道)を考えたスポーツのまちづくりなど、建築学的視点のみならずエコロジー、リサイクル、バリアフリー、そしてユニバーサルデザインの視点からパワーポイントやビデオを活用しながら紹介した。

全体を通して根底に流れていたキーワードは、住みやすいまちづくりや誰でも使えるものづくりのアイデアを「提案」する、ということであった。「提案」することを大切にすれば、批判、批評は姿を消し、更なるアイデアが豊富に出てくるだろうという示唆が印象的であった。

受講者からは、ユニバーサルデザインの概念が具体例とともに理解できたこと、学生の発想の転換のすばらしさ、「提案」型の考え方の重要さに強く共感できたこと、などが挙げられ、大変好評であった。



講座名 一般公開講座 エルダリィ・スクール
サクセスフル・エイジングへの挑戦 (第7回)

日時 平成16年11月13日(土) 13:00 ~ 15:00

会場 新潟県立看護大学ホール

受講者数 47名

講師 北川公子(新潟県立看護大学助教授)

講演テーマ 「物忘れをふせぐ戦略」

概要

本講座は、「記憶とは?」、「記憶の仕組み」、「老化による記憶の変化」、「物忘れと環境」、「物忘れをふせぐコツ」、「生活全体の見直し」の6つのセクションから構成されていた。まず、記憶の“時間”からみた分類や情報の種類からみた分類などを紹介した後、10個の絵を受講者に記憶してもらい、簡単な作業の後それらの絵を再生してもらおうというゲームを行い記憶の仕組みについて話が進められた。加齢するにしたがって低下する能力もあれば、良くなる能力もあることを指摘しながら、物忘れと認知症(痴呆)の違いについて説明がなされた。認知症を防ぐために推奨される日常的な趣味活動の例(旅行、料理)を統計的な分析結果から示し、物忘れをふせぐコツとなる生活行動と生活全体の見直しを提案した。頭の体操を適宜挿入しながら、こなれた表現で大変分かりやすく話されたので、参加者は興味深く聞くことができ、活発な質疑応答がなされた。



講座名	一般公開講座 エルダリィ・スクール サクセスフル・エイジングへの挑戦 (第8回)
日時	平成16年11月27日(土) 13:00 ~ 15:00
会場	新潟県立看護大学ホール
受講者数	40名
講師	中島紀恵子 (新潟県立看護大学学長)
講演テーマ	「もしもに備えて～介護が必要になったとき」

概要

本講座では、痴呆ケアの課題を、1. うまく生きる、2. 痴呆の人と付き合う、3. 介護を上手に、の3つの観点から提起し、現実の社会の実態に即しながら理論的背景と実践の方法を分かりやすく話し、今後の解決策を提示した。

「加齢しても輝いて生きていたい、そんな願いをもっている人たちにお話ししたいと思います。」と始まり、平均寿命よりも健康寿命を重視することへと関心に移していくことがこれからは望まれるとした。また、「生きがいの場」から「居がい場」を見つけることを提唱し、痴呆性高齢者に秘められている様々な可能性を大切にすることを力説した。痴呆の人と付き合うことでは、ケアとは我々がその人がそのように生きて来て、そう考えていることを根本にすべきであって、病気を根本に置かないことであるとした。さらに、痴呆の中核症状に触れながら、それが周囲によってその人らしさを喪失させられた結果、いわば作られた障害となる場合があることを指摘し、その人の自己の尊厳を守ることにより心身の状態レベルを従来よりもゆっくりと下げていくことが、新しい痴呆ケアとなることを主張した。痴呆の人のケアを高齢者ケアの標準にすることを提案しながら、グループホームの例を紹介した。介護を上手にでは、デイケアを利用する介護主担者の気持ちや援助者に必要なケアスキルに触れながら、「お家で面倒をみないといけない」という観念であふれストレスがたまり、燃え尽きないように注意することが重要であることを述べた。受講者は、「人生80年のライフプランの参考となった」、「明るく輝きながら生きることの大切さなどについて参考になった」、など今後生きていく上で納得のいく示唆を得ることができたと述べていた。



2. 専門講座

1) 概要

専門講座では、県内の看護職者が、看護研究を行うための研究方法、あるいは看護の情報処理に関する知識や技術、看護のための英会話などを習得できるよう、研修プログラムを企画・運営した。

(1) 看護研究の基礎知識

講座「看護研究の基礎知識」は、看護職者が日常の業務の中で看護に関する研究テーマを掘り起こし研究ができるよう、研究方法や論文の書き方さらには研究を進める上での倫理的配慮などを学ぶための機会として企画・運営した。

(2) 看護研究ステップアップコース

「看護研究の基礎知識」を既に受講した方々を対象に、施設での研究指導者としての能力を養うことを目的として、看護研究ステップアップコースを企画・運営した。本講座は、受講者がアドバイザーから指導を受けながら、研究計画立案から論文作成までを実際に行い、さらに中間発表をすることで、看護研究のおおむね全過程を学ぶことができるプログラムとなっている。9月から翌年の2月までの間、アドバイザーから受講者が研究のノウハウを個人的に学んだ。その研究の成果を、平成17年2月19日(土)に『「看護研究ステップアップコース」中間発表会』で発表した。この発表会は、受講者が発表の方法を学ぶ機会でもあり、アドバイザーの指導のもと、パワーポイント等を駆使してプレゼンテーションを行い、さらには参会者との質疑応答をすることで、質の高い発表会を経験することができたと考えている。なお、受講者の研究発表の内容を後に掲載する。

(3) 看護英会話夏期・冬期セミナー

夏期セミナーは、初級と中級に分けて実施された。冬期セミナーは、日常会話で使うと便利な文法項目を中心に会話練習が進められた。両セミナーには、ネイティブ・スピーカーを配し、実践的な会話練習が行われるよう配慮した。

(4) 看護情報処理冬期セミナー

日常業務の中で活用する看護情報をより効率的に処理できることを目的として、受講者に少人数で細やかな指導が可能になるような内容を設定した。本講座は、毎年希望者が多く大変好評である。

(5) 新潟県看護職員臨地実習指導者養成講習会（一般公開の講座）

新潟県立看護大学看護研究交流センターでは、平成16年度の新潟県看護職員臨地実習指導者養成講習会を開催した。その一部を看護職の方々に一般公開したものが本講座である。

2) 開講講座と報告

(1) 看護研究の基礎知識

講座名	専門講座 「看護研究の基礎知識」
日時	平成16年7月10日(土)9:20~12:20, 7月11日(日)9:20~16:00
会場	新潟県立看護大学第1合同講義室
受講者数	学外者81名, 専攻科(地域看護学専攻)学生38名, 学内教員4名 計123名
講師	北川公子 新潟県立看護大学助教授 朝倉京子 新潟県立看護大学助教授
講演テーマ 概要	看護研究の意義と役割, 看護研究の基礎, 研究方法の選択他

1日目は、看護研究の意義、看護研究の重要性、看護研究の動向、研究のプロセス、研究における倫理的配慮、現場で実際に研究を進めるために、という内容で講義が行われた。講師が実際に学生の研究指導に携わった経験や友人が看護師になりたての頃にどのように研究に目覚めていったか、など具体的な例をあげながら講義が進められたので、受講者にとっては親しみやすく理解しやすかったと思われる。特に、倫理的な配慮については、受講者から質問が出された。2日目は、研究のトピックを見つめる、文献検索の方法、研究計画書の作成、研究デザインの選択、信頼性・妥当性、データ収集・分析の方法、といった内容であった。



全ての内容を理解するには短期間の日程では難しかったのではないかと考えられたが、講師がわかりやすく進めていったので、受講者には大変好評であった。アンケート結果(学外受講者63名回答)に関して述べると、受講者は平均年齢が39.3歳(平均看護経験15.5年)で、病院勤務の看護師が多かった。教育関係者が7名(昨年は4名)参加していた。講義の難易度については、わかりやすいという回答が40名で、難しいという回答が20名であった。講義時間については、1日半で「ちょうど良かった」という回答がほとんどであった。受講者が難しかった点としてあげていたのは、研究デザインの選択についてであった。現在、研究をしたいがテーマが具体的に決まっていないという受講者が半数であった。研究のアドバイザーについては半数がいなし、看護研究の講義も半数が今まで聞いたことがない、という回答であった。講義終了後質問をする受講者が非常に多かったことや、約40名の受講者が次年度ステップアップコースの受講を希望していることから、受講者の熱心な様子が伺えた研修であった。

(2) 看護研究ステップアップコース

講座名	専門講座「看護研究ステップアップコース」
日時	平成16年9月4日(土)9:20~12:15, 13:30~15:30
会場	新潟県立看護大学第1合同講義室, 情報処理室, 多目的室
受講者数	学外者3名, 専攻科(地域看護学専攻)学生38名, 学内教員1名 計42名
講師	朝倉京子 新潟県立看護大学助教授 橋本明浩 新潟県立看護大学助教授
講演テーマ	看護研究のまとめ方(論文の作成, 統計の実際), 研究へのアドバイス

概要

午前中は、研究のまとめ方で実際に論文を作成する上での注意点や論文の構成について90分の講義を行い、その後基本的な統計の手法について実際にコンピューターを使用しながら90分間の講義を行った。午後は、提出されている研究計画書についてアドバイザーが指導を行い、検討した。文献検索が不足していた受講者は、後に図書館で文献検索等を行った。



受講者の平均年齢は44歳(平均看護経験21年)であった。講義の難易度については、わかりやすいという回答が多かった。講義時間については、もう少しじっくり学びたいという意見もあったが、マンツーマンであったため、満足度が高かったようであった。実際に、コンピューターを使用しながら講義を受けたので、わかりやすい、という意見も多かった。

講座名	専門講座「看護研究ステップアップコース中間報告会」
日時	平成 17 年 2 月 1 9 日(土) 10:00～11:30
会場	新潟県立看護大学多目的室
受講者数	研究発表者 3 名, 当日受講者 2 名, その他 9 名 計 14 名
講師(アドバイザー)	小林優子(新潟県立看護大学助教授) 直成洋子(新潟県立看護大学講師) 酒井禎子(新潟県立看護大学講師)
講演テーマ	研究発表の実際 (研究成果の発表)

概要

本講座の受講者は、平成 15 年度本学看護研究交流センター主催の「看護研究の基礎」の受講経験者で、看護研究のテーマが明確であり研究計画立案がなされている方を対象とした。今年度は初めての開講であるが 3 名が受講した。9 月に「研究のまとめ方」および「統計処理のしかた」の講義を受講した後、2 月までの半年間で月 1 回アドバイザーの指導の下、研究計画書の見直し、研究の実際、まとめ、中間報告(プレゼンテーション)と一連の研究過程を学ぶという計画のもとで進んだ。今年度は、中越大震災の影響でアドバイザーとの面談の時期を調整せざるを得ないこともあったが、ほぼ順調なペースで研修が進んだと考えられる。

中間報告会の参加者は 14 名ではあったが、他施設の看護師の出席もあり、ディスカッションも活発に行われ、有意義な講座であった。研究発表者が今回の研究を完成させ学会あるいは研究会等でその成果を報告し、また施設内で研究の指導者として活躍されることを期待したい。



中間発表報告書 1

母性看護学実習前における看護学生の不安

川上久美子（厚生連中央看護専門学校）

はじめに

看護教育にとって臨地実習の果たす役割は大きい。領域実習の1つである母性看護学実習は、1個体の人間が母体からの依存生活を終え、胎外生活を歩みだす過程に携わることができ、まさに人の生命誕生が実感できる実習である。だが、少子化世代を過ごした看護学生において、実習で妊婦・産婦・褥婦・新生児と初めて接することも少なくないことから、今までかかわった体験がない未知なる分野への学習ともいえる。看護学実習における意識(不安)について木上¹⁾らの研究報告によれば、『実習初日の意識(不安)は、母性看護学実習のほうが成人看護学実習より、「学校で習ったことと違うことがある」「申し送り報告ができない」「指導者の質問に答えられない」「見ているだけで手が出せない」の4項目が有意に高かった』と述べており、母性看護学実習の方が成人看護学実習より過度の緊張を持ち不安を抱えたまま実習の日を迎えることが示唆されている。

そこで、今回の研究では、母性看護学実習に向けて不安はどのようなものであるのかを知り、母性看護学実習前の学生の緊張を和らげる必要があると考え質問用紙調査を行った。その結果、母性看護学実習に限定した実習前の看護学生の抱く不安内容を分析したので報告する。

I. 研究目的

本研究の目的は、看護学生が母性看護学実習前に抱く不安がどのようなものであるのかについて明らかにすることである。そして、その結果をもとに実習前のオリエンテーションの内容、母性看護学実習の学習の進め方に役立てていく。

II. 研究方法

1. 研究対象：A看護学校3年過程の母性看護学実習を行う3年生16名、いずれも成人看護学実習、老年看護学実習、在宅看護学実習は履修している。
2. 研究期間：2004年7月から10月
3. 調査方法：実習前のオリエンテーションを受ける前に、質問紙調査を実施した。質問内容は、実習前の不安については自由回答とした。
4. データの分析方法：Berelson, B. の内容分析を参考にし、ある対象に関連してどのような事項が述べられているかという言及事項分析の手法を用いた。記録単位は、母性看護学実習前の不安内容が記述されている主語と述語を1文章とした。文脈単位は、記述されている学生のそのままの言葉を活かし整理し、次いで、分析対象と

する記述を意味内容の類似性に従い分類し、その分類を忠実に反映したカテゴリーネームをつけ、分類した記録単位数を算出した。

5. 倫理的配慮：対象者に研究の意図を説明し、個人が特定できないように配慮した。

Ⅲ. 研究結果

16人中13人から回答が得られ、回収率は76%であった。対象者の年齢は20～21歳で、女性12人、男性1人であった。

母性実習開始前の不安の記述内容は、79の記録単位であった。これらのうち、母性看護学実習開始前の不安とは関係ない記録(22記録単位)を除く57記録単位を分析の対象とした。その結果、10カテゴリーに分類することができた。最も多かったカテゴリーは、病棟スタッフとの関係(13記録単位)であった。次いで、母性実習記録の記載に関する困難性(10記録単位)、学習項目が多い(6記録単位)、母性看護学の知識不足(6記録単位)精神面の不安定感及び混乱(6記録単位)、対象者とのコミュニケーション技術(5記録単位)、実習場での行動が具象化できない(4記録単位)、事前学習の不足(3記録単位)、看護過程の困難性(2記録単位)、母性看護における技術の修得不足(2記録単位)となっていた。以下の表1に、記録単位の多いカテゴリー名の順にその内容を示した。

表1 母性看護学実習開始前における不安

カテゴリ名	文脈 (57)	合計
1. 病棟スタッフとの関係	看護師・助産師が厳しい方と聞いて少し不安。(7) 何故怒られるのか教えて欲しい。(3) 看護師がやさしく教えてくれるか。(1) 指導者はベテランさんでいるんなことを当たり前のように知っているのか、それについていけるか。(2)	13
2. 母性実習記録の記載に関する困難性	記録用紙がたくさんあり、わけがわからなくなりそう。(4) 記録の書き方がわからない。(3) 記録が他の実習とは違う。(2) 授業で1回しかしていないのできちんとできるか。(1)	10
3. 学習項目が多い	勉強する項目がたくさんありこれまで学習してきた成人や老年とは違う。(1) 他の病棟とは違って学習することがたくさんあるので覚えるのがたいへん。(2) 決められた期間内に多くの技術や実習がきちんと終わらせることができるか。(2) 日々行うことが様々なので学習についていけるか。(1)	6
4. 母性看護学の知識不足	大切な所をしっかりと覚えているか心配。(2) 1コ1コ復習していかなければならないがやっていけるか。(1) 実習で学んだことと国試勉強を関連して学習したいがきちんとできるか。(1) 母性についての知識が不足しているので学べているか。(1) 今までに習ったことを一気に活用しなければならないが忘れていくことが多い。(1)	6

5. 精神面の不安定感及び混乱	母性実習は自分でもよくわからないが不安だ。(1) 不安で考え、どうしていいかわからないうちに実習日となった。(1) とにかく緊張してうまくやっていたらいいか。(2) 全部がごちゃごちゃになっている。(1) 初めてのことばかりでわからないことだらけ。(1)	6
6. 対象者とのコミュニケーション技術	新生児・産婦・褥婦などたくさんいるのでどう関わっていこうか不安。(2) 初めて外来があるので人見知りする自分は妊婦さんとうまく話せるか。(1) 病気でない病棟に行くので受け持ちさんとの関わり方が不安。(1) 今までで老年の方を受け持ったので成人は初めてとなるのでコミュニケーションがうまくとれるか。(1)	5
7. 実習場での行動が具象化できない	病棟や外来・分娩など主にどのようなことをするのか1日の流れが把握できない。(1) 他の病棟とは違った環境なので実習中にスムーズに行動できるか。(1) 今までの病棟と全く流れなどが違い、全体的に不安。(1) どういうふうに進めていいか、まだよくわからなくて不安だ。(1)	4
8. 事前学習の不足	事前学習ができていず実習についていけないか。(1) 事前学習について何をどこまで学習し臨めばいいのかわからない。(1) どこが重要なかわからず覚えておかななくてはいけないのかわからず実習についていけないか。(1)	3
9. 看護過程の困難性	看護過程を展開するのが遅く、受け持ち期間の短い母性実習ではきちんと対象を理解し、日々の看護を展開していかけるか。(1) 看護過程が成人と異なるのでアセスメントなど難しそう。(1)	2
10. 母性実習で行う技術習得不足	小さな赤ちゃんを沐浴させるときなど泣かせてしまわないか。(1) 自分がした学習が現場で役に立たないかもしれない。(1)	2

IV. 考察

母性看護学実習開始前における不安内容の10カテゴリについて考察する。最も多かったカテゴリ名は、カテゴリ1. 病棟スタッフとの関係で13の記録単位であり「看護師・助産師が厳しい方と聞いて少し不安」には7記録単位であった。「厳しい方」は学生の苦手とする人物像であることがわかる。しかし、どのような場面で「厳しい方」と表現しているのかについては、今回の文脈では探れていない。他に、「何故おこられるのか」「やさしく教えてくれるか」とスタッフとの人間関係に不安を抱いている。実習は、スタッフとの人間関係がよいことで実習の学びは深まることから、病棟の環境においてスタッフと学生が接する場面として、実習計画の報告、援助のお願いをする時、援助の実際の場合など、学生が意見及び質問が述べやすくするような工夫が必要である。納富²⁾らによれば、「母性看護学実習において感じる戸惑いは、人間関係、学習および技術の未熟さに関することが多く、多くの学生が他の臨床実習よりも戸惑いが大きいと感じていることが明らかとなった」と述べている。このことから人間関係の成立が整うことが実習の学びに影響を及ぼすと思われる。また、「ベテランさんでいろんなことを当たり前のように知っているのだからそれについていけるか」より、知

識豊富なスタッフには適わないことは事実であり、その知識の差は埋めようがない。だが、どうにか挑戦したい思いもやや感じ取られる。

カテゴリ 2. 母性実習記録の記載に関する困難性 10 の記録単位であった。「記録用紙がたくさんありわけがわからなくなりそう」には 4 記録単位、「記録の書き方がわからない」には 3 記録単位であることから、妊娠・分娩・産褥・新生児と日々かかわる毎に記録用紙が変わり、項目に沿った内容提示が求められ、限られた時間で記載しなければならない。従って、集中して記録整理に臨まないと日々変化する対象者にそぐわない事態を招き、実習記録がすすまなくなることが予想される。事前に示された未記入の実習記録の用紙を見ると、課題の数を認識し「きちんとできるか」という不安が生じると思われる。

カテゴリ 1. 2. で示したことに関連して、正村³⁾らの調査によれば『臨床実習中の学生は、「実習記録を書くのに時間外に多くの時間を要すること」「看護師との関係」に非常に強いまたは適応できないほどのストレスを感じていた』と述べている。学生にとって、実習における「記録の時間」「看護師との関係」について負担がかかることから、実習時間内の記録時間の確保や書くべき内容を示唆し、学生への関わり方について学生に関心を持って応じていく態度が求められる。学習者である学生が学べる環境や評価となる記録に不安を抱くのは当然といえる。

学習内容における不安として、カテゴリ 3. 学習項目が多い 6、カテゴリ 4. 母性看護学の知識不足 6、カテゴリ 8. 事前学習の不足 3、カテゴリ 10. 母性実習で行う技術習得不足 2 の記録単位であった。カテゴリ 3. にある「他の病棟とは違って学習することがたくさんある」に関して、A看護学校では、母性看護実習期間が約 2 週間の期間で、母性看護学実習目標は母性及び新生児の身体・精神・社会的な特徴の理解及び援助を行い、母性看護技術を実施することが課せられている。同じくカテゴリ 3. に「決められた期間内に多くの技術や実習があるのできちんと終わらせられるか」のように、母性の技術や実習の学習をやらなければならないことは分かっているが、期間内によい結果となるのかという課題達成の不安が見られる。カテゴリ 8. に「事前学習ができていない」や「赤ちゃんの沐浴で泣かせてしまわないか」といった母性の技術が未だ十分ではないことがわかる。学内で実習前の技術練習は、新生児の人形を用いて実施しているが、実際の新生児を沐浴することへの戸惑いはぬぐいきれないと思われる。カテゴリ 4. の「大切なところをしっかりと覚えているか」とこれから取り組む実習に向けて、知識の未充足が発生してしまわないかという不安の表れといえる。

カテゴリ 9. 看護過程の困難性 2 の記録単位だった。「受け持ち期間の短い母性実習ではきちんと対象者を理解し日々の看護を展開していけるか」学生が受け持つ褥婦は、産褥 4~5 日目頃までにアセスメント、問題点、解決策を導きだすので産褥経過の復古現象と進行現象といった生理的変化の観察から何が問題であるのか思考するのにのんびりしてられない。成人看護学実習のように受け持ち患者を一定期間持続して患者さんとかかわる実習とは展開が異なることから母性実習の困難性は伺える。正常経過をたどる褥婦の場合は、明らかな問題状況が定まらず対象にあった母性看護の援助が見つげづらい。だが、実践している助産師や看護師の援助技術を学び、母性看護の技術や方法を体験することで、不十分ではあるが、現段階での知識・技術で何が行えるのかを見つけることが必要であると思われる。実際に実

施するまでには、アセスメントの整理や思考過程の展開と学生の負担がかかる学習となる。今までの成人看護学実習・老年看護学実習を経てきてはいても、新たな実習となることへの不安を抱いているものと思われる。

カテゴリ 5. 精神面の不安定感及び混乱 6 の記録単位だった。「母性実習は自分でもよく分からないが不安だ」において、前回までの成人看護学実習・老年看護学実習では、疾患による健康を逸脱した患者が対象である。だが、母性実習では、母性の健康期における妊娠・出産・産褥・新生児の特徴を学ぶ看護である。更に、1 回のみの実習で繰り返しがなく、過去の実習体験がそのまま活用できない状況にある。従って、母性実習での学習が実習前において予測困難に陥りやすいと思われる。

カテゴリ 6. 対象者とのコミュニケーション技術 5 の記録単位だった。「新生児・産婦・褥婦などたくさんいるのでどう関わっていこうか不安」「初めての外来があるので人見知りする自分は妊婦さんとうまく話せるか」のように、母性の対象者とのコミュニケーションが不得手のようである。コミュニケーションには、相手とある話題に関して会話により成立するが、妊婦と初めて接する学生は何を聞いたらいいのか見当がつかないのかもしれない。

A看護学校の学生が日常生活の中で、どのくらい他者とのコミュニケーションをとっているのか不明である。日頃、学校と自宅との往復の中では、よほど積極的に人との会話を持つ機会をもたないとコミュニケーションの機会がないと思われる。コミュニケーションは、看護の対象者との関係作りには欠かせないものであり、苦手とならないように改善すべき項目である。

カテゴリ 7. 実習場での行動が具象化できない 4 の記録単位だった。「病棟や外来・分娩など主にどのようなことをするのか 1 日の流れが把握できない」「他の病棟とは違った環境なので実習中にスムーズに行動できるか」ということから、学生自身の行動が、主体的な学習行動がとれるように思うことから、実習前より行動に関して不安を抱くものと思われる。

以上、母性看護学実習開始前における不安について 10 のカテゴリを明らかにできたことで、この率直な学生の声を受け止め、実習前における不安要因を緩和でき、母性看護での実習が困難とならないように学生指導に取り組みたい。

V. 結論

母性看護学実習開始前における不安について 10 カテゴリの考察より、以下の 5 つが明らかになった。

1. 学生は病棟スタッフとの関係について不安を抱くことが 13 記録単位と最も多かった。
2. 母性看護学実習は妊婦・産婦・褥婦・新生児看護における実習記録に負担感を抱いていた。
3. 母性看護の学習内容の知識と技術の未充足感を抱いていた。
4. 母性看護学と他の領域との看護過程の違いに困難性を抱いている。
5. 母性の対象者とのコミュニケーションを不得手と認識している。

おわりに

母性看護学実習は、妊娠、出産、育児と将来の自分の姿を想定しながら学習でき、自己の母性感も刺激を受ける。だが、妊婦・産婦・褥婦・新生児と日々の生理的変化を観察し、対象を理解した援助方法を導きだすには母性看護学の知識を含む応用力が必要である。それには病棟スタッフからの知識や技術を学ぶことが必要である。従って、実習に行く前から恐い、不安という負の感情を抱いてしまうと学習効果が抑えられてしまう。教員は、母性看護学実習の学習準備が整うように不安を緩和するため、実習前における学生への学習準備の充実をはかり、臨床との実習調整を行うことが必要である。

謝辞

本研究をまとめるにあたり御指導くださいました新潟県立看護大学成人看護学講座助教授小林優子先生はじめ、諸先生方に心より感謝いたします。アンケート調査にご協力頂きました学生諸氏に感謝いたします。

引用文献

- 1) 木上静代、福丸洋子、他：母性看護学実習における意識（不安）とストレスの状況。九州国立看護教育紀要、第6巻 第1号 p7～13、2003.
- 2) 納富昭子、山本真紀子、他：母性看護実習における看護学生の戸惑いとその対処行動。三重看護学誌、Vol. 3, No. 2, p41～51.
- 3) 正村啓子、東玲子、他：臨床実習中の看護学生のストレス認知とそれを規定する日常生活関連要因の検討。山口医学、Vol. 52, No. 1/2, p 13～21.

参考文献

- 4) 落合真喜子、大田原裕美、他：臨床実習における不安とストレス感情<その1>。看護展望、Vol. 21 No. 13 p91～97.
- 5) 落合真喜子、大田原裕美、他：臨床実習における不安とストレス感情<その2>。看護展望、Vol. 22 No. 3 p 101～109.
- 6) 安酸史子：学生とともに作る臨地実習教育、看護教育 2000 - 11
- 7) 行光美音子他：看護学生が母性看護学実習を特殊と考える要因、母性衛生、38巻、3号 p225.
- 8) 舟島なをみ：質的研究への挑戦、医学書院、1999.

中間発表報告書 2

分娩におけるリフレクソロジーの効果
— 初産婦の分娩所要時間の短縮に焦点をあてて —

村越 小百合 (長岡中央総合病院)

I. はじめに

妊娠、分娩は病気ではなく、経過は個人差があり、その経過によっては医療的介入（陣痛促進剤等の薬剤の使用等）が行われている。近年、より自然な分娩に関心が高まる中、代替療法が注目されており、その1つとしてリフレクソロジーがある。

リフレクソロジーとは、1930年代アメリカのユニス インガム女史によって確立された¹⁾、手の親指やほかの指を使って、足や手にある反射区をマッサージするトリートメント法である。反射区をマッサージすることで身体の色々な部分に働きかけ、身体全体に作用を与える¹⁾と言われており、身体機能の正常化、緊張やストレスの緩和、神経機能や血流の促進等、自然治癒力を引き出すと考えられている²⁾。これらの事から、妊娠中の身体的、生理的变化やストレスなどにも効果があると考えられる。

平山³⁾は、妊娠中からリフレクソロジーを施術し、妊娠中毒症の妊婦の血圧を安定させ、分娩できたケースや分娩第1期の時間短縮等の効果があったことを報告している。また産科領域以外でも末期ガン患者のQOLの向上⁴⁾や倦怠感の緩和の報告⁵⁾もされている。

今まで行われてきた研究報告の中では定期的な施術、アロマセラピーの併用で行われているものがみられるが、当病棟で可能な方法として分娩第1期でリフレクソロジーを施術するという介入方法を設定し、初産婦の分娩所要時間の短縮の効果を検討することとした。

II. 研究目的

分娩第1期にある初産婦にリフレクソロジーを施術することにより分娩所要時間の短縮に効果があるかを介入群とコントロール群の比較を通して明らかにする。

仮説：分娩第1期にリフレクソロジーを施術した初産婦は、施術しない初産婦よりも分娩所要時間が短い

III. 用語の操作的定義

リフレクソロジー：身体機能の正常化、緊張やストレスの緩和等を目的とし足底や足背を指で圧する方法

分娩所要時間：10分毎の規則的な陣痛開始から子宮口全開大までを分娩第1期、児娩出までを第2期、胎盤娩出までを第3期とし全期の合計時間を言う。

IV. 研究方法

1. 期間

平成17年1月3日から現在データ収集中

2. 対象

介入群は①正常な妊娠経過の初産婦で、②陣痛発来後入院をし、薬剤等の分娩促進をおこなっておらず、③施術の時点で未破水であり、④入院時リフレクソロジーの施術を含めた研究参加への承諾に同意を得られた者とした。

コントロール群は①②で正常分娩を行った者で、「研究にあたってのお願い」を説明し、研究参加への承諾が得られた者とした。

3. 方法

リフレクソロジーを施術する介入群と、通常のケアを行うコントロール群の分娩所要時間を比較する準実験研究を行う。まずコントロール群となる対象に対して、分娩後に所要時間を研究データとして使用することに同意を得て、コントロール群のデータとして収集する。

次に実験群(介入群)となる対象に対して陣痛発来入院後、研究についての説明会を行い、同意が得られた後、分娩第1期に下記の手順でリフレクソロジーを施術する。

<手順>

- ・ 施術者は全対象において研究者である同一の助産師が行う。
- ・ 陣痛室にて、タオルで足底を中心に清拭し、対象者の安楽な姿勢で行う。
- ・ リフレクソロジーの手順は頭の中から足先まで全身の反射区を網羅するよう足裏全体を刺激する。全体では約40分間であるが対象者の状態に合わせて可能な範囲で行う。

4. 倫理的配慮

介入群には、研究の趣旨とリフレクソロジーの方法に加え、調査への協力は自由意志であることや参加を拒否しても不利益は受けないこと、データは無記名で取り扱うこと、プライバシーの保持について文書を用いて説明し、同意の得られた者を対象とすることとした。また、施術中は産婦の状態を観察しながら行い、医師の協力を得ながら行うこととした。

また、コントロール群には、分娩所要時間を研究データとして使用すること、データは無記名で取り扱うこと、プライバシーの保持について説明し、同意の得られた者のデータを使用することとした。

5. データ分析の方向性

介入群、コントロール群で分娩所要時間の測定を行い、両群の平均値を統計的に比較することにより、リフレクソロジーが分娩所要時間の短縮に効果があったかどうかを検討する。

引用文献

- 1) ニコラ・ホール. リフレクソロジー 手足による健康法. フレグランスジャーナル社. 1998
- 2) アン・ギランダース. リフレクソロジー ステップ バイ ステップ. 産調出版. 1997
- 3) 平山 博章. 産科領域におけるリフレクソロジー. 助産婦雑誌 2002 ; 56 (9) : p52-8.
- 4) 服鳥 景子, 有田 麻美, 富田 悦子. がん患者のQOL向上を目指したリフレクソロジーの効果の検討. 日本看護学会論文集看護総合 2001 ; 32rd : p20-2
- 5) 宮内 貴子, 小原 弘之, 末広 洋子. 終末期がん患者の倦怠感に対するアロマセラピーの有効性の検討. ターミナルケア 2002 ; 12 (6) : p526-30

「分娩におけるリフレクソロジーの効果についての研究」へのご協力をお願い

近年、より自然な分娩に関心が高まる中、代替療法が注目されています。

その中の1つとして、リフレクソロジーが妊娠中の援助として取り上げられるようになってきました。リフレクソロジーとは、いわゆる足裏マッサージで、足裏をマッサージする事で身体の色々な部分に働きかけます。身体機能の正常化、緊張やストレスの緩和、血行の促進等、自然治癒力を引き出すという働きから、お産に良い効果があると期待されています。

そのため、本研究では初めてお産をされる方を対象として、リフレクソロジーを施術する事により、自然分娩の分娩所要時間の短縮に効果があるかということ明らかにする研究を行うことにしました。

方法は陣痛室に入室後約40分間、リフレクソロジーとして足底や足背に手の指で圧を加えるマッサージを行います。施術は皆様の状態を観察しながら医師の協力を得ながら行いますので、マッサージによる強い痛みを生じたり、分娩に悪影響を及ぼすような事は一切ございません。ぜひ本研究の趣旨をご理解頂き、調査にご協力いただけますよう、よろしくお願いいたします。

なお調査に際しましては次の事に留意いたします。

- * 調査にご協力いただくかどうかは、皆様の自由意志でございます。またいつでも途中でやめる事が出来ます。お断りになられても皆様が受ける治療サービスに関して不利益を被ることは一切ありません。本研究に関しての不安やご不明な点等がありましたら遠慮なく助産師 村越までお伝えください。
- * 研究結果については、研究にご参加いただいた皆様のお名前が外部に出るようなことは一切ございません。研究に得られたデータは無記名で数値として取り扱うと共にプライバシーの保持には十分努めます。

何卒ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

長岡中央総合病院

新館2階病棟 助産師 村越 小百合

平成17年 月 日

ご署名 _____

研究にあたってのお願い

より自然なお産を行うために、分娩時間短縮に向けた効果的な看護ケアに関する研究を行っています。

そのために皆様の分娩所要時間をデータとして使わせていただきたいと思います。データは無記名で数値として取り扱わせていただき、プライバシーの保護には充分留意いたします。

研究のデータ及び結果は研究以外に用いることはありません。

皆様のご協力をお願いいたします。

長岡中央総合病院

新館2階病棟 助産師 村越 小百合

平成17年 月 日

ご署名 _____

中間発表報告書 3

看護師の家族看護に対する意識調査

— 当院の実態 —

星野和子（稲越美幸・本田香・中山順子）

済生会三条病院

Key word : 家族看護、家族への援助、看護師の意識

I. はじめに

現在家族の小規模化、女性の就労率の変化、高齢化率の増加、要介護者の増加などが進んできている。入院するという事は、患者様はもとより家族にとっても大変なことである。渡辺氏¹⁾は「患者を一単位とせず、家族を一単位としてかわり、援助していくことが大切」と述べている。今求められている家族看護学とは、より質の高いケアを目指すために、家族をも看護の対象として援助することが重要であると認識されるようになってきている。

しかし、実際私たち看護師は家族をどのように捉えているのだろうか。患者のためにある資源的存在としてまた、患者をよりよく理解するための背景的存在として捉えている事が多い。そして、看護師は患者への援助の限界を感じると「患者を最も支えてくれているかけがえのないもの（家族）」にそれを望んでしまいがちである。

そこで、本研究は家族への関わりで積極的な部分・消極的な部分を把握し、今後の家族への援助の一資料にするため、当院看護師の家族看護に対する意識の実態を明らかにすることを目的とした。

II. 用語の定義

家族看護：患者を含み家族をまるごと援助の対象とする看護

III. 研究方法

1. 調査時期：2004年10月～11月の1週間
2. 調査対象者：研究ならびに発表の承諾を得た当院看護師144名
3. 調査方法：質問紙調査による自己記入式
4. 調査内容：対象者の属性は、年齢、看護職経験年数、勤務場所、家族の人数（本人を含む）、「家族看護」という言葉を知っているかどうか、看護師になってからの家族の入院経験の有無である。質問内容は、渡辺ら²⁾の「家族看護学」に関する文献を基に合計23項目の質問紙を作成した。その質問内容は、＜家族成員に対する援助＞9項目・＜家族成員間の関係性に働きかける援助＞6項目・＜家族単位の社会性に働きかける援助＞8項目の3つのカテゴリーから構成した。家族看護の意識の程度は、全く意識していない1点～常に意識している5点の5段階で回答を求めた。
5. 分析方法：統計処理的にはSPSSを用い、属性と意識の程度の検定には、Wilcoxonの順位和検定・Kruskal Wallisの検定を使用した。
6. 倫理的配慮：研究ならびに発表の承諾を得た上で回答者が特定されないこと、業務上の不

利益が生じないことを質問紙に明記し、回収した。

IV. 結果及び考察

1. 対象者の概要

対象者の概要については<表 1>に示した。

項目	属性	人数 (%)
年齢	20 歳代	38 (26)
	30 歳代	60 (42)
	40 歳代以上	46 (32)
経験年数	1-5 年未満	30 (21)
	5-10 年未満	37 (26)
	10 年以上	77 (53)
勤務場所	病棟勤務	84 (58)
	その他	60 (42)
家族人数	独居	2 (1)
	2 世帯家族	66 (46)
	5 人以上	76 (53)
「家族看護」という言葉		
	知っている	120 (83)
	知らない	24 (17)
家族の入院経験	有	113 (78)
	無	31 (22)

対象者の年齢の内訳は、21 才から 52 才で平均年齢 35.8 才 (SD±8.62)。経験年数は、1 年から 34 年で平均経験年数は 13.4 年だった。

勤務場所別では、病棟勤務者が 84 名 (58%)、それ以外 (外来勤務者・老人保健施設) 60 名 (42%) を占めた。

家族人数では、独居が 2 名、夫婦あるいはその子供を含めた二世帯家族構成が 66 名、5 人以上が 76 名であった。

「家族看護」という言葉を知っている者は 120 名 (83%)、知らない者は 24 名 (17%) であった。

家族の入院経験については、入院経験有 113 名 (78%)、入院経験無 31 名 (22%) であった。

2. 家族看護に関する意識の得点

家族看護に関する意識の全項目の平均得点は 3.27 点であった。構成要素別及び項目別の平均得点は<表 2>に示した。

意識の得点において、構成要素別で<家族成員に対する援助>がもっとも高い得点だった

(図 1 参照)。渡辺ら²⁾は、「個々の家族成員に対する教育的働きかけは、看護のあらゆる領域で最も多く用いられている看護援助方法である。」と述べている。このことは、本研究結果の最高得点が「家族が患者の病状や障害を理解できるように説明する。」「患者の良い変化を伝える」という項目だったことから分かるように、主に患者に関する説明・助言であり、渡辺らの文献と一致すると言える。逆にもっとも低い得点の構成要素は「家族成員間の関係性に働きかける援助」(図 2 参照)で、中でも「家族に他の家族の思いを代弁する」が低得点だった。渡辺ら²⁾の看護職の役割の中で、「家族内部の相互作用の触媒役として家族内のコミュニケーションを促進させる・家族の情緒的交流を促す」とある。しかし、このような援助は、交代勤務の中で家族背景が把握しきれない、さらに看護師が相手の気持ちを代弁し家族成員双方に考えるきっかけを与えるという援助は評価しにくく、現状では困難な状況にあると思える。もう一つの構成要素「家族単位の社会性に働きかける援助」(図 3 参照)の中に「社会資源を紹介する」がある。当院でも家族が介護を遂行するために、家族にあった社会資源を紹介することは退院調整等で日頃から家族計画に盛り込まれている為、意識が高かったと考える。しかし、最低点の項目「家族会などの組織を紹介する」は、看護者自身も紹介ルートがわからなかったり、家族会とのつながりが薄いため意識が低かったのではないかと考える。これからは、院内での紹介や情報提供は意識されているので、院外とのつながりに意識を置いて看護援助を行っていかなければならない。

3. 対象者の属性別にみた意識の程度

属性別にみた意識の程度は「表 3」に示した。

経験年数別に見ると、5 年未満と 10 年以上の看護師とでは、10 年以上の看護師に 11 項目で有意差があった。これは、5 年未満の看護師では、業務の経験も少なく、またリーダー経験も未熟であり、患者に直接関わる援助が主体である。経験年数を積むと、勤務異動や結婚・子育て等で、諸経験にも幅が出てくる為、患者を取り巻く環境や家族にも意識がいくのではないかとと思われる。また、患者や家族の立場で考えると、若い看護師より経験年数のある看護師を選んで声をかけてくる事が多いのも差が出た一つと考える。経験年数 5~10 年未満の看護師と 10 年以上の看護師とでは、「家族が患者の病状や障害を理解できるように説明する」の 1 項目で有意差が認められた。経験年数 5 年未満の看護師と 5~10 年未満の看護師とでは、全質問項目に於いて意識の程度に有意な差は見られなかった。このことは、5~10 年未満の看護師では、結婚・出産・育児等で仕事が中断してしまう事もあり、5 年未満の看護師と差がなかったのではないかと考えられた。

「家族看護」という言葉を知っている看護師は約 8 割と多く、全質問項目で知らない看護師より家族看護に対する意識の程度が高かった。このことは「家族看護」という言葉を知っているからこそ、日常業務の中で意識的にかかわろうとしていたからだと思える。

家族に入院経験の有る看護師は、無い看護師より家族看護に対する意識の程度に差があった。これは、家族が入院したときに自分が患者の家族という立場を経験していることから、家族が入院を経験している看護師はしていない看護師より家族看護に対する意識が高かったと思える。看護師はいつも患者・家族の対場に立ち援助していかなければならない。

勤務場所別では、病棟勤務者のほうが家族と接する機会が多い為、他の勤務場所の看護師

より家族看護に対する意識が高かったと思われる。

IV. 結論

1. 家族看護に関する意識の得点では〈家族成員に対する援助〉が一番意識が高く、〈家族成員間の関係性に働きかける援助〉は意識が低い。
2. 経験年数 10 年以上の看護師は「家族看護」という言葉を知っている看護師も多く、家族への関わりの意識も高い。
3. 家族に入院経験の有る看護師は、実体験があり家族看護に対する意識が高い。
4. 病棟勤務の方が家族に関わる機会が多く、家族看護に対する意識が高い。

V. おわりに

今回は、家族看護に対する意識調査で、全体としては「家族看護」に対する意識が高いことがわかった。しかし、どの程度実践されているかは不明である。今後この研究結果から更に「家族看護」への関心を深めてもらい、実践で役立ててもらいたい。

謝辞

本研究において、調査にご協力下さいました済生会三条病院の看護師の皆様、そして研究の機会を与えて下さいました新潟県立看護大学「看護研究ステップアップコース」の関係者の皆様、ここまでご指導頂きました直成先生に感謝いたします。

引用文献

- 1) 渡辺祐子 : 講演会「家族をケアするということ」, 家族ケア研究所, 新潟市市民プラザ, 2004. 4. 23.
- 2) 渡辺祐子、他 : 家族看護学 理論と実践 第2版, 日本看護協会出版会, 2001.

参考文献

- 1) 麻川みどり、他 : 看護婦の患者家族援助の向上に関わる意識と実践, 第27回日本看護学会集録(看護管理), 1996.
- 2) 五十嵐美恵子、他 : 家族看護の実践に関する実態調査 —プライマリナーズへのアンケート調査の分析—, 第33回日本看護学会集録(看護総合), 2002.

<表2> 家族看護に対する意識の得点

項目	平均得点
<家族成員に対する援助>	<3.53>
病状を説明	4.00
家族の役割の提示	3.17
介護技術の指導	3.57
不安な気持ち受容	3.93
家族の気持ちを傾聴	3.32
看護職はパートナー	3.08
家族の努力を評価	3.63
目標を家族と設定	3.05
患者の変化を伝える	4.00
<家族成員間の関係性に働きかける援助>	<2.96>
家族の話し合いの場を提供	2.92
他の家族の思いを代弁	2.51
役割分担を助言	2.75
家族の絆を意識させる	2.83
決断の為の情報提供	3.48
家族合意の話し合いを進める	3.24
<家族単位の社会性に働きかける援助>	<3.20>
社会資源の紹介	3.56
社会資源の導入	3.47
生活環境の調整	3.21
主治医に説明を求める	3.42
家族会の紹介	2.20
ケアの窓口となる	3.03
ケアに必要な職種と連携	3.37
ケア体制の再検討	3.29

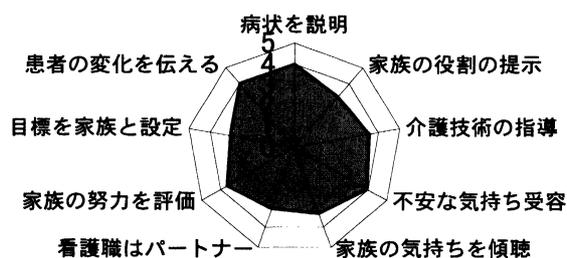


図1 家族成員に対する援助

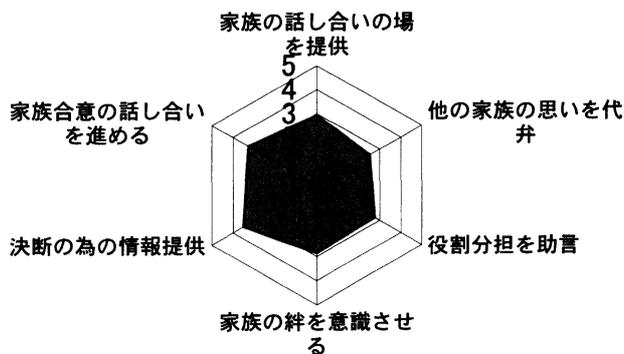


図2 家族成員間の関係性に働きかける援助

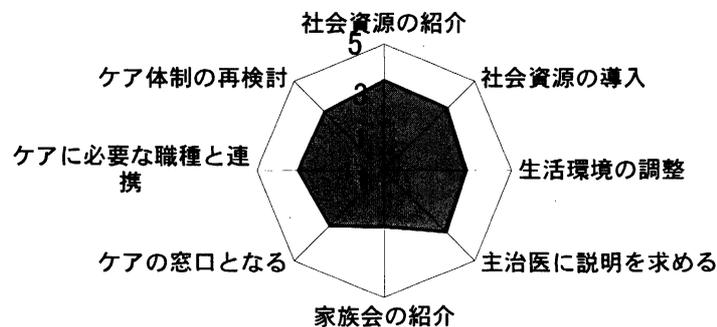


図3 家族単位の社会性に働きかける援助

＜表3＞対象者の属性別にみた意識の程度

	経験年数5年未満 と10年以上	5年未満と5～10 年未満	5～10年未満と10 年以上	家族看護という言 葉を知っていると 知らない	家族の入院経験 の有無	病棟勤務者と それ以外
＜家族成員に対する援助＞						
家族が患者の病状を理解できるように説明する	0.021	0.813	**0.016	**0.003	*0.000	*0.000
家族の役割を提示する	0.040	0.105	0.725	*0.000	*0.000	0.939
家族に必要な介護技術を指導する	**0.001	0.036	0.154	*0.000	*0.000	*0.000
家族の不安な気持ちを受け止める	0.040	0.409	0.200	**0.003	*0.000	**0.021
家族との面接を設け家族の気持ちを傾聴する	**0.001	0.060	0.165	*0.000	*0.000	**0.001
看護職は家族のパートナーであることを伝える	0.020	0.160	0.388	*0.000	*0.000	0.127
その家族なりの工夫や努力を評価する	**0.002	0.198	0.064	*0.000	*0.000	*0.000
患者の目標を家族も含めて設定する	0.074	0.406	0.368	*0.000	*0.000	0.290
患者の良い変化を伝える	0.050	0.285	0.359	*0.000	*0.000	0.157
＜家族成員間の関係性に働きかけける援助＞						
家族と患者・家族同士の話し合いの場を提供	0.039	0.351	0.229	*0.000	*0.000	**0.008
家族に他の家族の思いを代弁する	*0.000	0.025	0.119	*0.000	*0.000	*0.000
家族の役割分担について助言する	**0.010	0.268	0.131	*0.000	*0.000	*0.000
家族の絆を意識させる	**0.009	0.382	0.079	*0.000	*0.000	*0.000
家族全体の決断が出来る様情報提供する	0.193	0.740	0.282	*0.000	*0.000	**0.101
家族全体の合意の為に話し合いを進める	**0.008	0.276	0.123	*0.000	*0.000	*0.000
＜家族単位の社会性に働きかけける援助＞						
家族へ社会資源を紹介する	0.101	0.908	0.088	*0.000	*0.000	**0.001
社会資源の導入について家族の意思決定を促す	0.083	0.883	0.109	*0.000	*0.000	*0.000
生活環境(住環境)を調整する	**0.005	0.319	0.075	*0.000	*0.000	*0.000
家族自ら主治医に説明を求めよう促していく	0.063	0.928	0.043	*0.000	*0.000	*0.000
家族会などの組織を紹介する	**0.010	0.254	0.093	*0.000	*0.000	*0.000
家族に対してケアの窓口となる	0.052	0.697	0.081	*0.000	*0.000	**0.008
ケアに必要な職種と連携をとりケア体制を確立する	**0.013	0.454	0.127	*0.000	*0.000	*0.000
経過に合わせてケア体制を再検討する	**0.014	0.319	0.199	*0.000	*0.000	*0.000

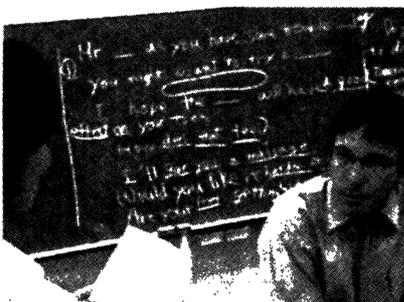
*P<0.001 **P<0.01 ***P<0.05

(3) 看護英会話セミナー

講座名	専門講座 「看護英会話夏期セミナー」
日時	平成16年8月30日(月), 31日(火) 9:30~15:10
会場	新潟県立看護大学 LL 教室, 第3講義室
受講者数	17名
講師	中村博生 新潟県立看護大学助教授 山本淳子 新潟県立看護大学講師
講演テーマ	初級: 外来と病棟での会話 中級: 入院患者への対応

概要

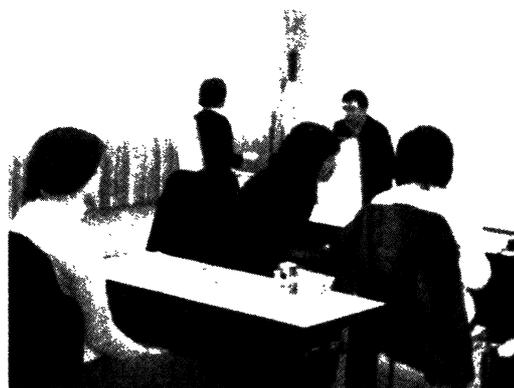
本年度は、昨年度の参会者のアンケート結果から、初級と中級に分け自主選択によってクラスを選び参加するという形態で講座を開催した。初級の1日目は、英語の音声に関する聞き取りと発音の仕方、「外来での会話」のビデオ視聴、聞き取りと発音の練習などを行った。外来で役に立つ英語表現についてテキスト「看護英会話」を用いて音読したり暗記したりして、実際に患者とコミュニケーションを行うことを想定した練習を行った。2日目の前半は、外国人講師との実践的な会話練習を行った。また、中級では1日目、2日目通して実践看護英会話用テキスト「Health Talk」を用い、患者の日常生活の情報収集、リハビリテーション、足浴、洗髪などの場面で展開される英会話例をビデオを視聴しながら学習した。2日目の後半には初級同様外国人講師を患者に見立てて、覚えた表現を使ってロールプレイングを行った。受講者の評価は、どの項目においても高い評価を得ることができ、2つのクラスに分けた成果が現れたようである。



講座名	専門講座 「看護英会話冬期セミナー」
日時	平成17年3月14日(月), 15日(火) 9:30~15:10
会場	アトリウム長岡
参加人数	5名
講師	中村博生 新潟県立看護大学助教授
講演テーマ	病棟での会話 “Having a baby will change you” “Let’s talk about <i>ATARIMAE</i> ”

概要

本年度冬期セミナーは、参加人数の関係と受講者のレベルに合わせて、中級以上の教材を用意して実施した。1日目は、病棟での会話を文法的な説明(関係代名詞や現在完了形)を加えながら、実際に応用できるように練習した。2日目は、外国人講師による“Having a baby will change you!”と“Let’s talk about *ATARIMAE*”と題する2つの話を聞き、講師との英語でのやりとりの中で、コミュニケーションスキルを学んだ。また、2日目の午後は、少人数のメリットを生かして、外国人講師と多くの時間一対一で実践的な会話練習を行った。参加者の評価は、日程については概ね良好で、講座の内容の質・量ともに「ちょうど良い」が大半を占めた。少人数のため一対一での会話が十分にでき、とても好評であった。外国人講師によるスピーチも、受講者個々に対応したインターアクションがあり、わかりやすいという評価を得ることができた。



(4) 看護情報処理セミナー

講座名	専門講座 「看護情報処理冬期セミナー」
日時	第1回 平成16年12月16日(木)・17日(金) 第2回 平成17年1月20日(木)・21日(金)
会場	新潟県立看護大学情報演習室
受講者数	第1回12名 第2回12名
講師	橋本明浩(新潟県立看護大学助教授)
講演テーマ	Windows基本操作, 統計分析とデータの見方と解釈 他

概要

今年度の看護情報処理冬期セミナーは、看護職に必要な基本的なコンピュータリテラシーを身に付けるため、前半に「上手で高速な情報検索技術と正確な情報の取得、活用」や「構造的なワードプロセッシング技術」に関するインストラクションがなされた。また、後半では、やや専門的な「データベースと表計算ソフトウェア操作」と「プレゼンテーション技術」が指導され、最後に「総合討論」が行われた。

本講座は、少人数のセミナーで、補佐員(サブティーチャー)を置き、一人一人にいきとどく講座を目指している。受講者はほとんどが遠方から来られたにもかかわらず、早朝から熱心に質疑応答を行いながら2日間のセミナーを受講した。

受講者からは、今までほとんど使えずに自己流で使用していたエクセルやパワーポイントの使い方を学び、表作成や表計算、プレゼンテーションの仕方などが簡単にできることがわかって、参考になったと述べていた。



(5) 新潟県看護職員臨地実習指導者養成講習会（一般公開の講座）

講座名：新潟県看護職員臨地実習指導者養成講習会特別講義

- ① 日 時 8月23日(月) 10:00～12:30
会場 新潟県立看護大学ホール
受講者数 65名
講師 中島紀恵子(新潟県立看護大学学長)
講演テーマ 「看護実践能力の充実に向けて」
- ② 日 時 9月6日(月) 13:00～17:00
会場 新潟県立看護大学ホール
受講者数 85名
講師 舟島なをみ(千葉大学看護学部教授)
講演テーマ 「看護教育とその評価」
- ③ 日 時 9月27日(月) 10:00～12:30
会場 新潟県立看護大学ホール
受講者数 71名
講師 野地有子(新潟県立看護大学教授)
講演テーマ 「楽しく学ぶクリティカル・シンキング」
- ④ 日 時 9月29日(水) 13:15～15:45
会場 新潟県立看護大学ホール
受講者数 66名
講師 島森好子(京都大学医学部附属病院看護部長)
講演テーマ 「現場におけるリスク・マネジメントから見た看護教育への期待」

概要

これらの講義は、看護職員等の現任研修に関する事業として、昨年から本センターが企画・運営を担当している新潟県看護職員臨地実習指導者養成講習会のプログラム 240 時間の内、オリジナルで企画した 21 時間の特別講義の一部である。

いずれも近年非常に重要かつ話題となっているテーマを取り上げ、その分野では屈指の方々を講師として招いている。参加者からは「学びが大きかった」、「自分の学生の頃と比べて看護教育の状況が大きく変化していることを知ることが出来てよかった」、「もう少し長く聞きたかった」、「次年度も是非継続してほしい」、等の意見が聞かれ大変好評であった。

3. 出前講座

1) 村松町食生活改善推進委員協議会主催

講座名	出前講座 「生活習慣病について～生活から見える病気と予防～」
日時	平成16年5月24日(月) 10:30～11:45
会場	村松町保健センター集団指導室
受講者数	54名 (村松町食生活改善推進委員)
講師	吉山直樹 新潟県立看護大学教授

概要	(1) 「健康日本21」とは？ (2) 生活習慣病の定義 (3) 肥満病 若年・中年男性に急増 (4) 高血圧 2,000万人, 最多の生活習慣病 (5) がん 増え続ける肺がん, 肝臓がん, 大腸がん (6) 糖尿病 自動車保有台数と比例し, この10年で倍増 (7) 「タバコ病」 最大のリスクファクター, 若年喫煙が大問題
----	--

2) 上越市立北諏訪小学校主催

講座名	出前講座 「今の子供たちに必要な性教育」
日時	平成17年2月15日(火) 14:30～16:00
会場	上越市立北諏訪小学校
受講者数	35名(保護者, 教職員)
講師	加城貴美子 新潟県立看護大学教授

概要	1. 「性」とは！ 2. 親が知っておきたい正しい性の知識の前に！ 3. 家庭で性教育をするにあたっての親の行動変容
----	--

Ⅲ. 総括と今後の展望

一般公開講座の「特別講演」は、アンケート提出者の8割近くが「非常に良かった」あるいは「良かった」という回答で、さらに前述の報告にも見られるように受講者からの質の高い反応を得たことから、部会での企画・運営が成功したとあってよいと思われる。この企画は、受講者から大変好評を博しているため、今後も本学看護研究交流センターならではの講演会として企画していくこととする。

「ナイチンゲールの時代から現代看護を読む」では、5回の講座に合計で290人の受講者があった。内訳は一般の方が28名、看護職が63名、学生が199名であった。アンケートの結果、「ナイチンゲールの思想を現代の視点で、解説し、現代の看護観に大きな示唆を与えてくださり、大変興味深かった」、「カイゼルスウェルトで行われた話が興味深かった」、「ナイチンゲールの人間像を細かく知ることができた」、「イギリスの看護や病院と日本のもの

との違いを知り、外国の看護というものに興味・関心が湧いた」などの感想が聞かれた。また、「ナイチンゲール研究についての話は、何回聞いても新鮮で、実践に生かせると思います。全コースを通して学びの多い講座でした」という記述に代表されるように、この企画に対する評価は高かった。次の企画についても、再度ナイチンゲールに関して、という要望もあったが、とりわけ、ナイチンゲールの母国イギリスの看護や病院に興味をもたれた方々からの、感想が多く寄せられた。そこで次年度は、海外の看護に関する公開講座を企画することが部会で提案され了承された。全体的なタイトルは、「海外の看護と日本の看護」という方向で企画し、5つ程度の講座を設定したいと考えている。

「エルダリィ・スクール」では、受講者の健康に関する興味・関心が非常に高いと感じられた。現代の食生活の問題、長寿のための食事、老人の転倒・骨折の予防、嚥下困難、脳の働きを衰えさせない取組、そして「人生80年のライフプラン」などが講座で話されたが、これらのことが受講者にとって、今後生きていく上で納得のいく示唆であったとするアンケート結果があった。また、今年度から本企画に他大学との提携プログラムとして、新潟工科大学の先生方を講師としてお招きして、講座の3回を担っていただいた。3人の講師がそれぞれの専門の立場から、ユニバーサルデザイン、介護や福祉に用いられる機器、住みやすいまちづくりなどについて、独自の理論を本講座の趣旨を踏まえてわかりやすく解説していただいた。受講者は、提携プログラムについてその新鮮さ、内容の豊富さ、楽しさなどを上げており、好印象を抱いていたと考えられる。また、参加型の講座（トランポビクスなど）では参加者が生き生きと活動しており、さらに発展した講座を開講していく方向が示された。以上のことより、本企画は次年度に向けて、受講者の健康に関する興味・関心をさらに充足するための講座を企画・運営することとした。

専門講座の「看護研究の基礎知識」は、おおむね昨年同様受講者からは良い評価を受けたので、このまま継続していくこととした。また、新しく企画・運営した「看護研究ステップアップコース」（施設で研究を指導できる能力を養うことを目的としたコース）では、15年度の「看護研究の基礎知識」の受講者を対象として受講者を募り、3名の受講者ではあったが、中間発表までアドバイザーの指導のもと、有意義な研究活動を経験することができたと考えている。したがって、より多くの受講者から看護研究のノウハウを学んでいただくために、本企画を次年度も行うこととした。

「看護英会話夏期セミナー」では、少人数でのレッスンが行われ、「看護英会話冬期セミナー」では会場を長岡に移して行われた。長岡での開催は参会者からの要望であったが、参加人数が前年度に比べかなり少なかったため、次年度は季節を変えて開講することとした。また、「看護情報処理冬期セミナー」では、昨年度と同様2回開講し、個々の受講者のニーズに応えるべく、より実践的な講座を開講する予定である。

「出前講座」と「研究会支援」については、市町村の要望と指定された教員との連携の中で実施された。本年度は前記の2つの「出前講座」が開催された。今後も地域との連携の中で、さらなる支援を展開していきたいと考えている。

以上、新潟県立看護大学看護研究交流センター平成16年度生涯学習・研修支援部会の活動が、充実した内容で計画的かつ円滑に進められ、県民の生涯学習の支援及び看護職員等の現

任研修に寄与し、県民から高い評価を得たことをここに報告する。

最後に、平成 16 年度生涯学習・研修支援部会講座担当者一覧表を示し終わりとする。

新潟県立看護大学看護研究交流センター

平成 16 年度生涯学習・研修支援部会講座担当者一覧表

	講 座 名	企画・運営担当者名
1. 一般公開講座	(1) 特別講演	加藤光寶 中村博生
	(2) ナイチンゲールの時代から 現代看護を読む	佐々木美佐子 堀 良子 水口陽子(企画協力)
	(3) エルダリィ・スクール (サクセスフル・エイジング)	田中キミ子 中村博生
2. 専門講座	(1) 看護研究の基礎	深澤佳代子
	(2) ステップアップコース	佐々木美佐子 堀 良子
	(3) 看護英会話夏期・冬期 セミナー	中村博生
	(4) 看護情報処理冬期セミナー	中村博生
	(5) 新潟県看護職員臨地実習指導 者養成講習会一般公開の講座	深澤佳代子 佐々木美佐子
3. 出前講座・研究会支援	出前講座	中村博生

新潟県立看護大学看護研究交流センター年報

平成 16 年度 生涯学習・研究支援部会の活動報告

文責 班長 中村 博生